

想像界の生物相

ベニンの魚足王

民博 機関研究員 戸田 美佳子



資料名 | 飾り板

標本番号 | H0174737

制作地 | ナイジェリア (推定)

収集地 | ケニア

サイズ | 高さ 47 cm × 幅 37 cm × 厚さ 9 cm

ナマズのような両足をもつ人像。この人物は、装飾された腰帯を付けており、地位が高いのだろう。傍らには彼を両肩から支える二人の人物が描かれている(右頁)。この魚足人像のモチーフは、現在のナイジェリア南部に二世紀ごろに成立し、一九世紀末まで栄えたベニン王国で制作された装飾板や象牙の彫刻(下図)などに頻繁に用いられていた。

ベニン王国はポルトガルと一四八五年に初めて接触し、ヨーロッパとの交易をとおして発展した。一八九七年にイギリス軍に征服されるまで、サハラ以南アフリカでは稀にみる富、権力、そして軍事力をもつ世襲の王制が長期に渡って安定した王国を築いていた。

イギリスに戦利品として渡ったベニン美術の数々は、現在、その多くが大英博物館やベルリンの民族学博物館など欧米の博物館に展示や保管がされている。みんぱく所蔵の装飾板はケニアで購入されたものだが、魚足人像の図版をもとにナイジェリアで新しい時代に制作されたと考えられる。

かつてのベニン王宮では、柱が王宮の儀礼や戦いの様子をあらわした真鍮の装飾板で覆われていた。王宮の歴史を伝える

写実的な鑄造作品のなかで、奇態な魚足人像は異彩を放っている。

ダグラス・フレイザーは一九七二年の編著書のなかで、魚足人像は神や神格化された王(オバ)を描く際に用いられたと説明している。そして両足の魚は、西アフリカで広く信仰されている海(川)の神オロクンの象徴であるナマズをあらわしているという。

◆◆魚足王オーヘンの伝承◆◆

ベニン王国の魚足人像にはモデルとされる人物がいる。ベニン王国九代目のオバ、オーヘンである。オーヘン王はポルトガルとの接触以前の二四世紀ごろもしくは一五世紀初頭に在位したと推定されている。

伝承によると、オーヘン王は在位二五年のときに突如、両足が麻痺した。力の象徴であるはずの王が障害をもつという事態に、王のその後については相反するふたつの話が残された。王は慎重に隠していたが、あるとき、町の長が王より先に評議会へと入り、その事実を知ってしまう。そこで王は彼を処刑する。ここから話はふたつに分かれる。ひとつ目は、それらを知った民衆が王に反乱を起こし、王を投石で殺した、もしくは自殺に追い込んだ



ベニンの象牙彫刻とその拡大図(ベルリン民族学博物館所蔵)
© Foto: Ethnologisches Museum, Staatliche Museen zu Berlin
Fotograf: Dietrich Graf (CC BY-NC-SA 3.0 DE)

というもの。ふたつ目は、オーヘン王はオロクンが憑依したために足がナマズのようなになったと考えられた。その足は神聖な存在となり、それ以後、王はオロクン信仰の推進者として崇められたというものである。

ふたつ目の伝承は魚足人像のイメージと重なる。しかし、オロクン信仰から魚足人像が先に生まれ、そのイメージをもとにふたつ目の伝承が創られた可能性もある。イメージが先か、伝承が先か、どちらかはわからない。ただし、新しい時代になっても魚足王のモチーフが再生産され続けたという事実は、人びとが日常的な障害をめぐる葛藤を、代替可能な言説へと組み替えてきた創造的な営みでもあったのではないだろうか。